



子どもとメディア 北海道

子どもとメディア 北海道

第1号

2010年

7月発行



子どもとメディア公式インストラクター 北海道でふたり誕生！！

- 子どもとメディア北海道 代表あいさつ
- 「子どもとメディア北海道」の設立に寄せて
NPO 法人子どもとメディア常務理事 古野陽一氏
- 活動方針
- 「子どもとメディア北海道」が誕生するまで
- インストラクタープロフィール
- 会員募集のご案内

ご挨拶 子どもとメディア北海道代表 諏訪清隆

この度、皆様のおかげをもちまして「子どもとメディア 北海道」を発足することができましたことを心より御礼申し上げます。私達はメディア、特に電子メディアが子どもたちに及ぼす影響についての啓発を通して、子ども達をメディアのリスクから守ることを目的として会を設立致しました。



どうして子どもとメディアなのか

今、子ども達の周りにはテレビや携帯電話、インターネットをなど数々の電子メディアがあふれており、それらは私達の生活になくはならないものとなっています。これらの電子メディアは、とても便利で役に立つものですが、使い方によっては子どもたちに悪影響をもたらしてしまうものでもあります。

多くの子どもたちは、そのリスクを知らないうちにメディアに接してしまうため、さまざまなトラブルに巻き込まれているのが現状です。子どもたち自らが身を守る知識を持つことは必要なことですが、その前に私達大人が十分な知識を持ちリスクを理解して子どもたちとメディアの接触に向き合わなければなりません。

「北海道 いつも どこでも どこまでも」

私達は、子どもの発達段階に沿った電子メディアのリスクについての啓発を進めるとともに、「子どもとその家族が日々進化し続ける電子メディアと上手に付き合っていくにはどうしたら良いのか」を一緒に考えていくことを基本姿勢にしています。

そのために、私達は講演会、座談会、ワークショップといったさまざま場を通して、皆様に理解を深めていただき一緒に対策を考えていきたいと思えます。場所や人が変わればメディアとの接し方もさまざまです。これが正解だという答えが全てに当てはまることはありません。ですから、北海道内各地での活動を目指しています。家庭、学校、地域といったいろいろな場所で子どもとメディアについて、「もっと知ってもらい」、「一緒に考え」、メディアへの取り組みの輪が広がっていくこと目指しています。

北海道の未来を担う子どもたちのために会員の皆様をはじめ副会長、事務局と力を併せて、この会を大切に育てていきたいと考えております。

これからも皆様の温かいご支援を頂けますよう宜しくお願い申し上げます。

「子どもとメディア北海道」の設立に寄せて

NPO法人子どもとメディア常務理事 古野 陽一

子どもとメディア北海道の設立、おめでとうございます。

子どもの最善の利益の立場に立ち、子どもに対する電子メディアの影響を検討し、子どもとメディアの適切な関わりを啓発する活動が、新たに北の大地で始まることに向け、南の九州から大きな声でエールをお送りいたします。

2月の子どもとメディア全国フォーラム、5月の子どもとメディアインストラクター養成講座。いずれも福岡で行われた2つの当法人の事業に、発起人の諏訪さん、中谷さんがご参加いただいたことで本会の設立に至ったと聞きました。私たちのまいた種を受け止めてくださったこと、それを広げ根付かせるための活動をはじめてくださったことに、感動と感謝の念が湧き起こってきます。

大画面薄型テレビ、HD-DVD、リアリティを増す家庭用ゲーム機、一人一台ずつの携帯ゲーム機、なんでもありのインターネット、大人も子どもも手放せないケータイ。さらには、爆発的に広がるスマートフォン、学校への導入も検討されているパッド型パソコン、そして3D対応になっていくテレビ、ゲーム機、携帯ゲーム機。

いずれの機器も子どもの成長や発達に対する安全性は、一度も立証されていません。

それどころか、3D機器の基準を検討する3Dコンソーシアムは、「3DC安全ガイドライン改訂版」(4月20日発表)で「3D機器の子供の利用では発達段階の視機能への影響を考慮したうえで、利用が必要な場合は、大人の管理のもとに視聴の可否判断、視聴時間制限をするのが望ましい。」と明示しました。3D機器の発達への悪影響を公式に認めながら、それを保護者の責任に帰そうとしています。

2007年のユニセフの調査(OECD諸国対象)で、「孤独を感じる」と答えた日本の15歳は29.8%で断然の1位です。2位のアイスランドの10.3%を3倍も引き離す突出ぶりです。

2009年度に福岡市と共働で行った私たち法人の調査で「家族から信頼されて無い」と答えた子どもたちは、メディア依存と思われる群では17.2%、メディア依存度が健康と思われる群では3.5%と、5倍もの開きがあります。

遊び、学び、食、睡眠、そして家庭といった、子どもの成長に不可欠な環境が急激に貧困化しています。その最大の要因、根源となる要因と考えられるのが、子どもも大人もどっぷり漬かる電子メディアです。

気づき、知らせ、減らす。私たちがやるべきことは非常にシンプルです。

ひとりひとりが「スイッチOFF」という行動を取るだけで、確実に改善して行くことなのです。日本の北と南から、大きなうねりを起こしていきましょう

活動方針

目的

- ★子どもに対する電子メディアの影響を広く伝える。
- ★電子メディアとの適切なかかわり方を 子どもや大人と一緒に考える。

伝える対象は？

- ☆親(乳幼児・学童・思春期の子をもつ)
- ☆幼児、小学生・中学生・高校生本人
- ☆教師・支援者
- ☆広く一般市民

どのように伝えるの？

- ★子どもの成長・発達への影響を中心に。
- ★子どもの権利を尊重しながら。
- ★親の育ちを支援しつつ。
- ★地域のネットワークづくりに貢献するように。
- ★害ばかりでなく、メディアと健康的に上手に付き合えるように。

どんな方法で？

- ☆講演会・講座
- ☆出前授業
- ☆ワークショップ
- ☆情報誌・ホームページなど

メディアって何を指すの？

- ★テレビ・ビデオ・ゲーム・ネット・ケータイ・パソコンなど電子映像メディア
(本・ラジオは、電子映像メディアには含めていません)

現実にしっかり向き合うために

- ☆調査(アンケート)などから、子どもとメディア接触の現実を把握する。
- ☆データや事例・体験から対応策を一緒に考える。
- ☆子どもにとって危険性の高い道具であるなら、リテラシー(主体的に読み解く力)でもモラルでもなく、まずリスクの学習が必要。

伝えたい内容は？

- ★メディア依存を防ぐために(予防のための学び)。
- ★子どもの権利(発達を保障される)と大人の責任。
- ★「絶対だめ！」か「与えっぱなし」の二者択一ではない第3の方法。
- ★「やってみよう！とりくんでみよう！」と考えてもらえるようなルールの提供。
- ★ノーメディア・アウトメディア・スイッチオフなどの具体的な実践紹介。
- ★対話できる大人、困ったときに相談してもらえる大人になるためのアドバイス。
- ★電子メディア以外の楽しみ(遊び・体験)の大切さ。

いつかかなえたい会の夢

- ☆道内で活動している団体や個人の方々と交流したい。
- ☆家庭や学校・地域で、ノーメディア・アウトメディア・スイッチオフの実践を推し進めたい。
- ☆NPO法人子どもとメディアの公式インストラクター養成講座を北海道でも開催したい。
- ★ 地域や学校、団体での研修会の講師やワークショップのファシリテーターとしてぜひ、ご相談ください。
- ★ お問い合わせは、気軽に8ページの連絡先にご一報ください。

★まだまだひよっこですが、気持は熱いです！

「子どもとメディア北海道」が誕生するまで

諏訪は、子ども達の生活にゲーム機やケータイが深く入り込んできたことが原因で、直接、相手に言葉で思いを伝えることができなかつたり、人との関わりを持ちたがらない子どもが増えてきていることに危機感を感じていた。また、両親のメディア依存や誤った認識のために乳幼児をはじめとした子ども達の発達に脅かされることを心配していた。

2009年、NPO法人子どもとメディア 古野氏の講演を拝聴し、現代の子ども達の状況に愕然とし、「子ども達を守るためになんとかしなければ手遅れになる」と痛感する。小児科医が公式インストラクターの資格を持つことで、専門性を生かして子どもの発達とメディアについての啓蒙を広めたいと考えた。

中谷は、若い頃の小学校教員時代から、ゲームなどの電子メディアが子どもに与える影響が気になっていた。我が子の子育て中、乳児から思春期までメディアとのかかわりが親子の対話に深く関与していることを実感。いつか、啓発できる内容を学びたいと思っていた。

2009年度NPO法人お助けネットが某新聞社の子育て応援大賞を受賞し副賞をいただく。「中谷さん、研修に行ってもいいよ」と仲間に後押しされ、2010年2月に福岡市で開催された「子どもとメディア全国フォーラム」に参加。大いに刺激を受ける。

「北海道でも、子どもの発達を保障するために、メディアのリスクを大人が学び具体的に実践する必要」を痛感した。

NPO法人子どもとメディア公式インストラクター養成講座に参加しよう！

2010年5月福岡市にて4日間(12講座)の受講。受講者は、九州・中国・四国・関東・北海道地方から17人。

九州・中国・四国では、学習機会の提供が学校や地域で頻繁に行われていた。NPOと行政の協働事業として、全ての小中学校でメディアインストラクターが授業をしている市や町もあった。北海道ではどうだろう・・・親や支援者が、子どもとメディアのかかわり方に不安や疑問を持ちながらも、それぞれの家庭に任されているのが現実ではないだろうか。もっと、大人の責任として、学びあい交流しあいながら知恵を出し工夫して実践していく時ではないだろうか・・・。

まさか、遠く北海道からの参加者が自分以外にもいたとは・・・。1人では難しいが、複数人いれば、北海道でも実践できるかもしれない。

というわけで

「NPO法人子どもとメディア」様のご指導・ご支援もいただけることになり、まずは小さな一歩を踏み出すことになりました。代表と事務局長、事務局員2名の合わせて4名でのスタートです。関心をお持ちの多くのみなさまとゆるいネットワークでつながりながら、ともに学び、考え、行動できることを願っています。

インストラクターは、何をする人？

子どもに対する電子メディアの影響を広く知らせ、適切な関わり方を子どもや大人と一緒に考えていく人

★ 今回、北海道で誕生したインストラクター2人は、それぞれの経験や現在の仕事で得た知見を生かしながら、できるだけ多くの地域で、インストラクターとして活動したいと考えています。

1966年 栃木県生まれ

1991年 旭川医科大学医学部卒業

1991～2008年 自治医科大学小児科勤務。

途中 総合会津中央病院小児科医員、古河記念病院小児科医長、宇都宮社会保険病院小児科部長、茨城県立中央病院小児科部長

アメリカ デトロイト市ウェイン州立医科大学に留学

2008年～ 旭川赤十字病院小児科 第一小児科部長

一般小児科診療とともに、子どもの発達障害、心理疾患についての診察にあたっています。

すわ きよたか
諏訪 清隆

資格

医学博士、小児科専門医、小児神経科専門医、子どもの心相談医、日本てんかん学会臨床専門医、日本てんかん学会指導医、臨床遺伝専門医、子どもとメディア公式インストラクター

趣味：旅行、温泉、読書、映画鑑賞、北海道道の駅スタンプラリー など

連絡先：TEL：0166-22-8111（代表）、E-mail：kiyotaka_s@asahikawa-rch.gr.jp

インストラクター プロフィール

なかや みちえ
中谷 通恵

1960年 函館生まれ、苫小牧育ち。

1983年 北海道教育大学札幌分校卒業

1990年 夫の転勤のため小学校教諭を泣く泣く退職、白老町へ8ヶ月の娘と引っ越す。

1991年 育児サークルを保健師と立ち上げる

1993年 ミニコミ誌「子育て通信心の基地になりたくて」発行(9年間)

1998年 「託児グループぽっぽ」結成。 2002年 HP「ココキチねっと」開設

2004年 NPO法人お助けネット設立。

2007年 白老町より子育てふれあいセンターとして「つどいの広場事業」「ファミリーサポートセンター事業」を受託。

公職：北海道教育推進会議委員・北海道生涯学習審議会委員・北海道子どもの未来づくり審議会委員
白老町行政改革委員・白老町次世代育成支援行動計画策定委員 他

趣味：子ども(21歳・19歳)が家を出た淋しさをバレエで発散

連絡先：tel / fax 0144-82-2685 E-mail: michie-n@plum.plala.or.jp

子どもとメディア北海道 会員大募集！！

子どもとメディア北海道 ホームページアドレス
<http://childmediahk.web.fc2.com/>

会員になると 会議などはありません。ゆるやかなネットワークです。

- ★ 情報誌が届きます（年間4回発行予定）。
- ★ 学習会や交流会にご参加いただけます。

申込方法 入会申し込み用紙にご記入ください

☆同封の入会申し込み用紙に必要事項を記入して、FAXで事務局まで送信ください。
代表・事務局へのメールでも受け付けます。（申込用紙の必要事項をメールに書いて返信
ください）また、会費を郵便小為替で郵送される方は、封書で一緒にご送付ください。
☆入会申し込み用紙の送信と以下の会費の納入の確認をもって、情報誌の発送をさせてい
ただきます。その年度にすでに発行されている情報誌は全て送ります。

会費について 情報誌作成発行・事務費等に当てます

★年会費 2000円

★会費の納入方法は、代表・事務局への手渡しか、事務局まで郵便小為替（2000円
分）を郵送するかのいずれかをお願いいたします。

事務局(中谷 通恵 なかや みちえ)

〒059-0908 白老郡白老町緑丘1丁目3-34

TEL/FAX 0144-82-2685

メールアドレス michie-n@plum.plala.or.jp

入会申し込み

お問い合わせは

こちらまで